

## 安心安全な組織マーキング液の検討

◎砂岡 千鶴<sup>1)</sup>、岡村 卓哉<sup>1)</sup>、並木 幸子<sup>1)</sup>、山崎 泰樹<sup>1)</sup>、古谷津 純一<sup>1)</sup>  
獨協医科大学埼玉医療センター<sup>1)</sup>

【はじめに】当院では、切り出し時の組織へのマーキングとしてマーキュロクロム液を使用していたが、蛍光を発するために FISH (fluorescence in site hybridization) 法で偽陽性となる可能性があることや水銀を含むことから使用を中止した。そこで代替としてヘマトキシリン液を使用しているが、ヘマトキシリン液では着色時に組織に色素が拡散して滲むことや、包埋薄切時に赤系色素でマーキングされた検体と比較して青系色素は認識しにくいという問題が提起された。そこで今回マーキュロクロム液やヘマトキシリン液の代替となる色素を検討したので報告する。

【方法】使用した色素はインク、市販のマーキング液、食用色素赤である。それぞれの色素を用いて切り出し時に組織にマーキングした後、自動固定包埋装置にてパラフィン浸透を行い、その後ヘマトキシリン・エオジン (HE) 染色標本を作製した。切り出し時の組織への色素の着色と拡散度合い、パラフィン浸透後の色素の着色度合いの変化、HE 染色標本への影響を比較検討した。

【結果】食用色素赤は粘度が調整可能なため最も着色しや

すく、パラフィン浸透後も着色に変化を認めず最も良好であった。また HE 染色標本への影響がなく、さらに蛍光の発色を認めなかった。一方でインクは着色時に組織が色素を弾いてしまい、市販のマーキング液では HE 染色標本に色素の残留が認められた。

【まとめ】今回の検討より現在使用しているマーキング液の代替として食用色素赤が有効であると考ええる。また、医療安全の観点から同カセット内の隣り合う枝番号の識別を確実にするために、着色する色調を変えるという運用を想定して、食用色素の他の色でも同様に使用できるのか追加検討して報告する。

獨協医科大学埼玉医療センター 病理診断科  
048-965-4959 (直通)